

曹植「三良詩」考

——「文帝誅」との關連を中心として——

矢 田 博 士

一、序

曹植の「三良詩」、阮瑀・王粲の「詠史詩」は、いずれも春秋時代、秦の穆公の死に殉じた三人の善良な臣下、所謂〈三良〉を題材として詠んだ《詠史》の詩である。これらの詩は、同じ題材を用いていること、また、曹植・阮瑀・王粲の三人が同じ建安文壇の中で活動していたことなどから、ややもすれば同一の觀點から捉えられる傾向にある。

しかし、これらの詩を内容の點から見た場合、曹植の詩と阮瑀・王粲の詩との間には、はっきりとした差異が認められる。阮瑀・王粲の詩では、三良を死に追いやった穆公に對する非難という點に重點が置かれている。それに對し、曹植の詩では、三良の死を彼ら自身が主體的に選んだ死と捉え、穆

公を非難するというよりは、むしろ三良の穆公に對する忠誠という點に重點が置かれているのである。

曹植の詩と阮瑀・王粲の詩との間に、このような差異があるということについては、從來すでに指摘されてはいる。しかし、なぜこのような差異が生じたのか、という點については、いまだ必ずしも十分な議論がなされているわけではない。本稿では、この點について、曹植の「三良詩」を中心に考えてみたい。

その場合、特に問題となるのは、諸説が紛々としている曹植の「三良詩」の創作時期をいつに設定するか、ということである。なぜならば、創作時期をいつに設定するかによつて、先の問題に對する評價が大幅に變わってくるからである。そこで本稿では、曹植の「三良詩」の創作時期について

も、あわせて考えてみたい。

二、先行作品との異同

まず初めに、曹植の「三良詩」の内容が、どのような点において阮瑀・王粲の「詠史詩」と異同が見られるか、ということについて確認しておきたい。

阮瑀「詠史詩」

誤哉秦穆公、身沒從三良、
忠臣不違命、隨軀就死亡、
低頭闕墻戶、仰視日月光、
誰謂此可處、恩義不可忘、
路人爲流涕、黃鳥鳴高桑

王粲「詠史詩」

自古無殉死、達人共所知、
秦穆殺三良、惜哉空爾爲、
結髮事明君、受恩良不訐、
臨歿要之死、焉得不相隨、
妻子當門泣、兄弟哭路垂、
臨穴呼蒼天、涕下如縷縈、
人生各有志、終不爲此移、
同知埋身劇、心亦有所施、
生爲百夫雄、死爲壯士規、
黃鳥作悲詩、至今聲不虧

曹植「三良詩」

功名不可爲、忠義我所安、
秦穆先下世、三臣皆自殘、
生時等榮樂、既沒同憂患、
誰言捐軀易、殺身誠獨難、
攬涕登君墓、臨穴仰天歎、
長夜何冥冥、一往不復還、
黃鳥爲悲鳴、哀哉傷肺肝

阮瑀の詩に「誤哉秦穆公、身沒從三良」とあり、王粲の詩に「秦穆殺三良、惜哉空爾爲」とあるように、彼ら二人の詩は、いずれも三良を殉死に追いやった秦の穆公を非難することと主眼が置かれている。それに對して、曹植の詩では「秦穆先下世、三臣皆自殘」とあるように、三良の死を穆公に強要された受動的な死としてではなく、三良自らが選んだ自主的・主體的な死と捉え、三良の忠誠という點に主眼が置かれている。ここに阮瑀・王粲の詩と曹植の詩との異同がはっきりと確認されよう。つまり、この點にこそ曹植の「三良詩」の特異性が認められると言つてよい。

なお、曹植の「三良詩」の特異性については、すでに宋の劉克莊が次のように指摘している。

「三良」事見于『詩』『左傳』、皆云「秦穆殺之以殉」。

坡詩獨云「乃知三子殉公意、亦如齊之二客從田橫……」。此說甚新。後讀曹子建「三良詩」、云「秦穆先下世、……」。乃知子建已有此論。

（『後村先生大全集』卷百七十八）

三、三良殉死事件に對する二つの見解

阮瑤・王粲・曹植の詩に詠まれた「三良殉死」の事件とは、春秋時代・秦の穆公の死に子車氏の三人の子息（奄息・仲行・鍼虎）、所謂「三良」が殉じた事件をいう。が、この事件に對しては、二つの異なる見解が、漢代ごろまでに、すでに存在していた。即ち、

- ① 三良の死を秦の穆公に強要された死ととるもの。
- ② 三良の死を秦の穆公に對する忠義による自主的な死ととるもの。

といった二つの見解である。それを現存する資料に即して確認すると以下のようになる。

【①の見解を示すもの】

- (a) 秦伯任好卒、以子車氏之三子奄息・仲行・鍼虎爲殉、皆秦之良也。國人哀之爲之賦「黃鳥」。

曹植「三良詩」考（矢田）

（『春秋左氏傳』文公六年）

- (b) 「黃鳥」哀三良也。國人刺穆公以人從死而作、是詩也。

（『詩經』秦風「黃鳥」毛傳小序）

- (c) （蒙）毅對曰「……昔者秦穆公殺三良而死、罪百里奚而非其罪也、故立號曰繆。」（『史記』卷八八「蒙恬傳」）

【②の見解を示すもの】

- (d) （匡）衡上疏曰、「……臣竊考國風之詩、……秦穆貴信、而士多從死、……」（『漢書』卷八一「匡衡傳」）

- (e) 秦穆公與羣臣飲酒、酒酣、公曰「生共此樂、死共此哀」。於是奄息・仲行・鍼虎許諾。及公薨、皆從死。「黃鳥」詩所爲作也。

（『漢書』卷八一「匡衡傳」應劭注）

- (f) 「從死」、自殺以從死。（『詩經』秦風「黃鳥」鄭玄箋）

このように三良殉死事件に關する記述を列舉してみると、おおよそ次のような事實に氣がつくであろう。即ち、比較的古い文獻が①の見解を、逆に、比較的新しい文獻が②の見解を示している、という事實である。これより、三良殉死事件については、①こそが傳統的な見解であり、②は漢代ごろに新たに生じた見解である、と判斷できるのである。⁽¹⁾

とすれば、阮瑤・王粲は、三良の殉死をテーマとした詩を

作るにあたって、いずれも伝統的な見解をそのまま踏襲したのに對して、曹植は獨り傳統的な見解には依らず、漢代ごろに新たに生じた見解を用いて詩を作っていた、ということが、ここで確認できるであろう。とりわけ、(e)に見える「生共此樂、死共此哀」という穆公の言葉と、曹植の「三良詩」における「生時等榮樂、既沒同憂患」という句との類似は、おおいに着目すべきであろう。おそらく曹植は、より直接的には、(e)に見える見解に依據して「三良詩」を作ったものと考えられるのである。

では、なぜ曹植は、「三良詩」を作るにあたって、阮瑀・王粲とは異なり、漢代ごろに生じた新しい見解の方を採用したのであるか。以下、この問題について考えていくことにする。

四、創作時期の問題について

その前にまず、諸説紛々としている曹植の「三良詩」の創作時期について、それらを整理しておく必要がある。なぜならば、創作時期をいつに設定するかによって、先の問題に對する評價が大幅に変わってくると思われるからである。

曹植の「三良詩」の創作時期について、諸説を整理してみ

ると、おおよそ以下のようになるであろう。

①【阮瑀・王粲と互いに唱和したものとする説】

(A) 建安十六年、曹操の馬超討伐に従軍し關中に至った折りに、秦の穆公の墓に立ち寄って、阮瑀・王粲と共に作った、とみる説。

○余冠英『三曹詩選』（作家出版社、一九五六）

○徐公持「曹植詩歌的寫作年代問題」（『文史』第六輯所收、一九七九）

○王運熙「論建安文學的新面貌」（上海古籍出版社『漢魏六朝唐代文學論叢』所收、一九八二）

○趙福壇『曹魏父子詩選』（香港・三聯書店、一九八三）

○張可禮『三曹年譜』（齊魯書社、一九八三）

○吳雲・唐紹忠『王粲集注』（中州書畫社、一九八四）

○趙幼文『曹植集校注』（人民文學出版社、一九八四）

○劉知漸『建安文學編年史』（重慶出版社、一九八五）

○郁賢皓・張采民『建安七子詩箋注』（巴蜀書社、一九八八）

○伊藤正文「曹植詩補注稿（詩之四）」（『神戸大學文學部紀要』15、一九八八）

○殷義祥『三曹詩選譯』（巴蜀書社、一九八九）

○道家春代「建安期の曹植の詩について」（『名古屋女子大學紀要』36、人文社會編、一九九〇）

(B) 建安二十年、曹操の張魯討伐に従軍し關中に至った折りに、秦の穆公の墓に立ち寄って、王粲と共に作った、とみる説。

○清・朱緒曾『曹集考異』卷五

○民國・黃節『曹子建詩註』卷一（香港中華書局、一九七三）

②【曹植の感慨を寄託したものとする説】

(C) 武帝の死（建安二十五年）に殉じることができなかったことを悔いて作った、とみる説。

○唐・劉良『文選』卷二十一

○清・陳祚明『采菽堂古詩選』卷六

(D) 黄初年間以降の自己の不遇に對する感慨、もしくは、功名が建てられないことに對する感慨を敍べた、とみる説。

○唐・皎然『詩式』（清・朱緒曾『曹集考異』卷五「三良詩」注所引）

曹植「三良詩」考（矢田）

○古直『曹子建詩箋』（廣文書局、一九七六）

○鍾優民「曹植的詩歌」（黃山書社『曹植新探』所收、一九八四）

○市川桃子『詠史と詠物』（小學館、中國古典詩聚花3、一九八四）

(E) 特に時期は明示しないが、功名が建てられないことに對する感慨を敍べた、とみる説。

○小守郁子「曹植詩所感」（『名古屋大學文學部研究論集』63、一九七四）

○聶文郁『曹植詩解譯』（青海人民出版社、一九八五）

この結果から窺えることは、最近では、(A)建安十六年説が最も有力な説として多くの支持を集めているということである。とりわけ中國においては、ほとんど通説化する勢いにあるといつてよい。

もしかりに、この説が事實であるとするならば、曹植が「三良詩」を作るにあたって、阮瑀・王粲の依據した三良殉死事件に對する傳統的な見解を用いずに、漢代ごろに生じた新しい見解を用いた意圖として、當然、次のようなことは考えられるであろう。即ち、「評價の固定した穆公と三良の事

件へ從來と異なつた解釋を提出することによつて、人の意表に出よう」とした、ということである。

しかし、この建安十六年説は、果たして動かしがたい事實なのであろうか。無批判のまま支持するに足る決定的な説なのであろうか。この點について、筆者は甚だ疑問を抱かざるを得ない。よつて、是非ともこの點については確認しておく必要があるであらう。

五、建安十六年説は通説たりうるか

建安十六年説を最初に提示したのは余冠英である。その『三曹詩選』に次のようにいう。

建安十六年、曹植從軍征馬超曾到關中、這篇詩或許是過秦穆公墓弔古之作。

彼は、建安十六年の曹操の西征には阮瑀（建安十七年没）・王粲（建安二十二年没）・曹植の三人がともに從軍しているという事實を踏まえて、このような説を提示したものと思われる。ところが、彼はこうした自らの説を提示しただけで、先行説の當否については全く觸れてはいない。また、曹植が秦

の穆公の墓に立ち寄つたというのも、「或許」とあるように、彼の推測によるものであつて、明確な論據に基づくものではない。

この余冠英の説に對して補強を試みたのが、徐公持である。彼は前掲論文において、余冠英の説を補強するため、次のような論據を擧げる。

惟建安十六年説最具說服力、因爲其年曹植不但確曾從軍到了關中、而且他在一路上寫有多首作品、其中有一篇『述行賦』寫「尋曲路之南隅、觀秦政之驪墳……」、明白說了他曾到秦始皇墓上去弔了一番古。在這種情況下、他再去秦穆公墓上詠一首「三良」詩、自是順理成章事。

しかし、先行諸説の當否については、わずかに(B)建安二十年説に對しては、『魏志』鍾繇傳の裴注所引の『魏略』⁽³⁾といった客觀的な資料に基づいてそれを否定しているものの、その他の説に對しては、例えば(C)劉良の説に對しては、「曹操死後説、與詩旨有不合處、曹植不可能把自己同曹操的關係比作三良同秦穆公的關係」と、また(D)黃初年間説に對しては、「黃初年間説、也嫌脫空、缺乏有力的根據」と、自身の主觀

的な見解によって、それらを退けているだけであり、客観的な論據に基づいて否定しているわけでは決していない。また、先の補強説についても、曹植が秦の始皇帝の墓に立ち寄ったからといって、それを穆公の墓に立ち寄った確證とすることはできないであろう。

その他の著作について言えば、趙幼文『曹植集校注』、郁賢皓・張采民『建安七子詩箋注』に、わずかに(B)建安二十年説が成り立たないことに對する考證が見られる程度で、その他(C)(D)(E)の説に對しては、誰一人として言及していない。

つまり、(A)建安十六年説は、①阮瑀・王粲・曹植の詩が、ともに三良殉死をテーマとしていること、②その年に、阮瑀・王粲・曹植の三人が、いずれも曹操の西征に従軍し關中に赴いていること、③曹植が秦の始皇帝の墓に立ち寄っていること、④阮瑀が建安十七年に没していること、といった以上の四點の情況證據に基づいて推定されたものにすぎず、確證に基づいたものでは決していないのである。さらに、(A)説を支持する人の誰もが、(C)(D)(E)説に對しては、いまだ必ずしも明確な反證を持ち合わせてはいないのである。

とすれば、(A)建安十六年説を、「三良詩」の創作時期として決定的なものと斷定するわけにはいかないであろう。した

曹植「三良詩」考（矢田）

がって、このような説に無批判のまま依據するのは、はなはだ危険な行爲と言わざるを得ない。筆者はここで、今現在「三良詩」の創作時期として通説化する勢いにある(A)建安十六年説に對して、今一度それを考え直してみる必要があることを指摘しておきたい。

六、曹植詩における《詠史》手法の面から

筆者はむしろ、曹植の「三良詩」は黄初年間以降の作ではないか、そして曹植の「三良詩」が阮瑀・王粲の「詠史詩」と内容の面で異同が見られる原因は、實にこの點にこそ求められるのではないかと考える。少なくとも(A)建安十六年説が決定的なものではない以上、この詩を黄初年間以降に作られたものと假定して解釋を試みるという態度は、決して無益なことではあるまい。そこで以下、「三良詩」が黄初年間以降に作られたものと假定したとしても、十分に解釋が可能であることを證明してみたい。

まず初めに、曹植の「三良詩」において着目すべきは、冒頭の二句、「功名不可爲、忠義我所安」である。というのも、この言葉は、とりもなおさず曹植自身の感慨を率直に表したものと考えられるからである。この點については、すで

に清の陳祚明・何焯・丁晏などにも同様の指摘が見られる。

○ 此子建自鳴中懷、非詠三良也。詠三良何必言「功名不
可爲」。
(陳祚明『采菽堂古詩選』卷六)⁽⁵⁾

○ 「功名」一聯、是說自家語。

(何焯『義門讀書記』「文選」卷二)⁽⁶⁾

○ 首二句爲自家寫照、無限感慨。

(丁晏『曹集鉤評』卷四)

「三良詩」の冒頭の二句が、曹植自身の感慨を表したものであるという見方は、實は曹植における《詠史詩》の手法という面からみて、十分に考えられ得ることなのである。

曹植においては、《詠史詩》を作るにあたって、自らの境遇に深く關わりのある主題を冒頭でまず提起し、その後に着けて、冒頭に提起した主題に適合する例として歴史上の人物の事跡を描寫する、といった手法を用いる傾向が認められる。しかも、その傾向は當時においては、ほぼ曹植にのみ顯著に認められるものである。⁽⁷⁾

「三良詩」においても、秦の穆公と三良に關する記述は三句目より始まっていることから、基本的には彼獨自の手法に

基づいて作られているとみなしてよい。とすれば、「三良詩」における冒頭の二句もまた、曹植自身の境遇と深く關わりのある主題を提起したものであるという可能性は、極めて高いと判斷されよう。

七、曹植にとっての「功名」とは

では、曹植は「三良詩」の冒頭の二句において、どのような問題を提起しようとしたのであろうか。それを解く手がかりは、「功名」という言葉にあると思われる。では、曹植にとっての「功名」とは、具體的にはどのようなものであったのであろうか。それは主として、國の恩に報いるためには、自らの命を擲つてでも國難に赴く、という點に集約できであらう。そしてそれは、以下に擧げる曹植自身の言葉によって、十分に裏付けられるであらう。

◆ 棄身鋒刃端、性命安可懷、……、捐軀赴國難、視死忽如歸。
(白馬篇)

◆ 遠遊欲何之、吳國爲我仇、……、間居非吾志、甘心赴國憂。
(雜詩六首) 其五

◆ 願蒙矢石、建旗東嶽、庶立毫釐、微功自贖、危軀授

命、知足免戾、甘赴江湖、奮弋吳越。

（責躬詩）

◆ 諸王自計念、無功荷厚德、思一效筋力、糜軀以報國。

（聖皇篇）

◆ 臣之事君、必以殺身靖亂、以功報主也。……夫憂國忘

家、捐軀濟難、忠臣之志也。……志欲自効於明時、立功

於聖世。每覽史籍、觀古忠臣義士、出一朝之命、以殉國

家之難、身雖屠裂、而功勳著於景鍾、名稱垂於竹帛、未

嘗不撫心而歎息也。

（求自試表）

曹植にとっての「功名」が、主としてこのような點に求められるとするならば、「三良詩」の冒頭二句は、國君の恩に報いるため、自らの命を賭けてでも國難に赴き、功名を建てること、——それが果たせなくなった曹植自身の問題を提起したものであると結論されるであろう。

もしそうだとすれば、「三良詩」の創作時期としては、やはり黃初年間以降、即ち曹植が中央政界から締め出されて以降の作と考えるのが穩當であろう。なぜならば、建安年間の曹植には、まだ十分に我が身を賭けて國難に赴く機會、即ち「功名」を建てる機會が備わっていたからである。ましてや、建安十六年の從軍というのは、曹植にとってみれば、「功名」

曹植「三良詩」考（矢田）

を建てる願ってもない絶好の機會であったと言つてよい。そのような折りに、「功名不可爲」というような諦めにも似た言葉を發するとは、極めて考え難いことだと思われるのである。

八、「文帝誅」との關連において

では、曹植が彼自身の生涯において、國君の恩に報いることができなくなったと感じいるに至ったのは、いったいいつのことであつたのであろうか。また、冒頭におけるこうした曹植自身の問題提起と、三句目以降に描かれている「三良殉死」の歴史的事件とは、いったいどのような關連において、接點が求められるのであろうか。

これらの問題に對して、筆者は、曹植が黃初七年に文帝の死を哀悼して作つた「文帝誅」及びその序文の中に、それらを解く鍵を求めることができるのではないかと考える。

惟黃初七年五月七日、大行皇帝崩。……承問恍惚、慄慄哽咽。袖鋒抽刃、欲自僵斃。追慕三良、甘心同穴。感彼南風、惟以鬱滯。終於偕沒、指景自誓。……

（曹植「文帝誅」序）

文帝の死に直面した曹植は、その「文帝誄」の序文の中で、「袖鋒抽刃、欲自僵斃」や「終於偕沒、指景自誓」とあるように、自らその命を絶ち文帝の死に従いたいとの意志を表明する。その際に曹植が「追慕三良、甘心同穴」と、秦の穆公の死に自ら殉じた三良を追慕しているという事實は、おおいに注目すべきことであろう。なぜならば、曹植が三良を國君の死に殉じた忠義の士として認識している點が、「三良詩」における三良に對する認識と極めて正確に一致しているからである。

もちろん、三良に對する認識が一致しているという點のみによつて、「三良詩」が「文帝誄」と同時期の作であると即斷することはできないかもしれない。しかし、①曹植が「三良詩」の中で、彼自身の境遇に關わる問題を三良殉死事件に寄託して敍べている可能性が、《詠史詩》における彼獨自の手法の面から、指摘できること、②曹植が「三良詩」の典故として採擇している「三良殉死事件」とは、とりもなおさず、「國君の死に殉じる」という問題に對する後世の人々の關心を、強く喚起した事件であること、——以上の二點を考へ合わせた場合、「國君の死に殉じる」という問題について、曹植がそれを自らの問題として捉えなければならなかった時

期の作として「三良詩」を考えてみることは、決して無意味なことではあるまい。いやむしろ、曹植の「三良詩」を、文帝の死に従いたいとの意志を曹植自ら表明している「文帝誄」との關連において解釋してみることは、それ自體意義のあることだと言つてよい。

そこで以下、「三良詩」を「文帝誄」との關連において、すなわち、黃初七年、文帝の死を哀悼するため作られたものであると假定して、解釋を試みることにする。

九、文帝に對する哀悼歌

【功名不可爲、忠義我所安】

——（我が君、文帝がお亡くなりになり、その生前に）功名を建てることはできなかった。（かくなるうへは、その死に殉じることに）忠義を示すことこそ我が身の置き所である。——

曹植は、國恩に報いるためには、自らの命を賭けてでも功名を建てたいとの志を常々表明していた。とりわけ、文帝期においては、そうした意志をはっきりと表明しておく必要があったと想像される。文帝と曹植とは、太子の相續をめぐつて争つた間柄である。よつて、文帝の曹植に對する猜疑心・

警戒心は、他の諸王に對する以上に強いものであったと考えられる。事實、曹植は文帝から再三罪を得ている。このような情況を考慮した場合、曹植には、是非とも文帝に對して我が身の潔白を、換言すれば、文帝に對する忠誠を、身をもつて證明してみせる必要があったと考えるべきであらう。したがって、自らの命を賭けてでも功名を建てたいとの志を、曹植がとりわけ文帝に對しては強く表明しておかなくてはならなかったであらうことは、想像に難くないであらう。文帝を對象とした「責躬詩」や「聖皇篇」等に、そのような思いが率直に敍べられていることは、その點を有力に傍證していると言つてよい。

ところが、黃初七年五月、文帝は没してしまふのである。つまり、曹植が文帝に對して功名を建てる機會は、この時點で永久に失われてしまうことになるのである。まさしく曹植謂う所の「功名 爲すべからず」である。

では、文帝没後の曹植にとって、文帝に對する不滅の忠義を示す最高の方法として、いったいどのような方法が残されていたであらうか。おそらくそれは、「殉死」を表明することではなかったか。事實、「文帝誅」の中では、そのような意志表明がはっきりとなされている。とすれば、「三良詩」

曹植「三良詩」考（矢田）

の二句目に見える「忠義」とは、まさしく「文帝の死に殉じる」ということを意味しているのではないだろうか。

つまり、「三良詩」の冒頭二句は、文帝の生前に功名を建てることのできなかつた曹植が、文帝の死に殉じるといふ行爲にその身を委ねることによって、文帝に對して忠義を貫きたい、——との曹植自身の決意表明であつたと解釋できるのである。

【秦穆先下世、三臣皆自殘、生時等榮樂、既沒同憂患】

——（その昔、）秦の穆公がまず没すると、三人の良臣は自害して（その死に従つた。）（彼らは生前、宴席で）生きては榮樂を等しくし、死しては憂患を共にしよう（と誓ひ合つたのであつた。）——

三句目から六句目にかけては、秦の穆公の死に殉じた三良の事件について描かれる。この事件は、後世の人々に、「殉死」という問題を強烈に印象づけた事件として名高い。

冒頭二句を先のように解釋するならば、冒頭二句と三良殉死事件との關連については、まさに「殉死」という問題において、接點を見いだすことができるのである。つまり、殉死によって文帝への忠義を貫きたいとの自らの問題を、冒頭二

句において提起した曹植が、その問題に適合する例として、「三良殉死事件」をこの詩の典故として採用したのではないかと考えられるのである。

とすればさらに、曹植がなぜ、阮瑀や王粲のように「三良を殺した穆公を非難する」という『左傳』や『詩經』毛傳等の傳統的な見解を採擇せずに、「穆公への忠義から三良自らその死に従った」とする漢代頃より生じた新たな見解の方を採擇したのか、という問題について、その理由が自ずと明らかになるはずである。

【誰言捐軀易、殺身誠獨難】

——誰が言おうか。身を捐てることややさしいなど。我が身を殺すことは、誠に何よりもまして難しいことなのだ。——

君主の死に殉じること。これ以上にその君主への忠義を證明する行爲は、おそらくはあるまい。しかしながら、自らその命を絶つことは、簡単にできる行爲では決していない。そこに、君臣間における忠義という點での、構造上の大きな矛盾があると云ってよい。この二句は、その矛盾を實に的確に言い表わしていると言えよう。かりに、冒頭二句における決意

表明が、曹植の真心によるものであるならば、それは、とりもなおさず曹植自身の直面した矛盾であつたと言えよう。かつまた、結果的に文帝の死に殉じることができなかった曹植にとつて、穆公の死に殉じ忠義を貫いた三良は、それゆえに追慕の對象として強く意識されたことであらう。

【攬涕登君墓、臨穴仰天歎、長夜何冥冥、一往不復還、黃鳥爲悲鳴、哀哉傷肺肝】

——涙をおさえて我が君（文帝）の墓に登り、墓穴に臨み、天を仰いで嘆息した。（墓の中は）永遠と明けることのない夜のように、なんと暗いことよ。ひとたび（あの世へ）逝去したならば、二度と（この世に）もどることはない。（そばでは）黃鳥が（亡き文帝の）ために悲しげに鳴いている。（その聲を聞くと）哀しいことよ。胸もはりさけんばかりである。——

九句目以降（以下、後半部分と稱す）については、どのような場面を描寫したものか、という點において、先行譯の間でさまざまに解釋が分かれている。それらを整理すると以下の通りになる。

- ① 曹植が、三良の墓に登り、三良に對する哀悼の意を敍

べた、とする説。

② 三良が、秦の穆公の墓に登り、穆公に對する哀悼の意を敍べた、とする説。

③ 秦の國人が、三良の墓に登り、三良に對する哀悼の意を敍べた、とする説。

以上の三説は、それぞれ差異はあるものの、いずれも曹植の「三良詩」を、穆公に對する非難という點に主眼を置いた『詩經』秦風「黃鳥篇」、及び阮瑀・王粲の「詠史詩」等の先行作品との關連において、解釋を試みようとした點では、態度が一致している。しかし、「三良詩」の後半部分をこのような觀點から解釋したのでは、いずれの場合も、前半部分とのつながりにおいて、論理もしくは表現意圖の一貫性が見いだし難くなるのである。⁽⁹⁾この部分の解釋がこのように定まらないのは、もとを正せば、この點に原因があると言つてよい。

從來の見解では、「三良詩」の前半部分と後半部分とのこのような矛盾について、それを曹植自身の作詩上の過失、もしくは、心理の揺れ等によるものであらう、との評價を下している。⁽¹⁰⁾しかし、曹植の「三良詩」は紛れもなく一篇の完結した詩歌作品である。とすれば、そこには作者の一貫した論理

や表現意圖が存在すると思えるべきではないだろうか。なぜならば、創作者の心理として、この點に對する配慮は不可欠であると思われるからである。ましてや、曹植の「三良詩」は、前半部分で「功名不可爲、忠義我所安」「誰言捐軀易、殺身誠獨難」という具合に、曹植自身の理が説かれている作品である。このような説理性の高い作品の場合であれば、なおさら一貫した論理・表現意圖が重視されてしかるべきであらう。したがって、曹植の「三良詩」についてもまた、前半部分と後半部分とを結ぶ一貫した論理・表現意圖が見いだせるはずなのである。

筆者が、「三良詩」を「文帝誄」との關連において解釋しようとしたのは、まさにこのような觀點から解釋してこそ、はじめて「三良詩」における曹植の一貫した論理・表現意圖が明確になるのではないかと考えるからである。つまり、殉死によつて文帝への忠義を貫きたいとの決意を表明しながらも、結果的にはそれを果たすことができなかった曹植が、文帝の墓に登り、その死に對して哀悼の意を表した、——このように後半部分の場面を設定すれば、曹植の「三良詩」もまた、十分に一貫した論理・表現意圖のもとに解釋できるのである。⁽¹¹⁾

十、結語

曹植の「三良詩」は、往々にして阮瑀・王粲の「詠史詩」と同一の觀點から捉えられる傾向にある。

しかし筆者は、曹植の「三良詩」について、それを阮瑀・王粲の「詠史詩」との関連において解釋するよりは、むしろ曹植の「文帝誄」との関連において解釋すべきであると考え、その論據を整理すると以下の通りになる。

① 曹植は《詠史》の詩を作るにあたって、自らの境遇に密接した問題を提起し、それに對する彼自身の感慨を歴史上の人物に寄託して敍べるという傾向が、一般に認められる。したがって、「三良詩」についても、やはりそのような觀點からのアプローチが不可欠であると判斷されること。

② 「三良詩」に詠まれている三良殉死事件とは、後世の人々に「殉死」という問題を強烈に印象づけた事件であったと言つてよい。したがって、曹植の「三良詩」も、やはり「殉死」という問題との関連において解釋してみる必要があると判斷されること。つまり、曹植が「殉

死」という問題に對して、最も關心を高めていた時期の作として、「三良詩」を考えてみる必要があると判斷されること。

③ 文帝に對して忠義を盡くしたいと常々表明していた曹植にとって、文帝の死に直面した黃初七年という時期は、曹植の生涯の中でも、「殉死」という問題を最も身近な問題として捉えることのできる時期であつた、と考えられること。

④ 事實、曹植は文帝の死を哀悼した「文帝誄」の中で、殉死の意志を表明することによって、文帝に對する哀惜の情を表していること。

⑤ その際に曹植は、秦の穆公に殉じた三良を忠義の士として追慕していること。つまり、三良に對する認識が、「三良詩」と「文帝誄」とで、正確に一致していること。

⑥ 「三良詩」を「文帝誄」と同趣旨の作と假定して解釋した場合、これまで懸案とされていた「三良詩」における前半部分と後半部分との論理の矛盾が、解消できるところ。換言すれば、「文帝誄」との関連において解釋しなければ、「三良詩」に託された曹植の表現意圖は、一貫し

たものとして正確に解讀できない、と判断されること。

曹植にとって文帝は、血を分けた同母の兄であった。それゆえに、文帝の死に對して、曹植が哀惜の情を抱いたであろうことは、十分に想像される。とすれば、曹植が、文帝に對する殉死を詩文等で表現することによって、そのような感情を表明することは、基本的に考えられてよいことであろう。

また一方、曹植は、文帝から再三罪を得るなど冷遇され續けてきただけに、その死に對しては、一面において、解放感・安堵感を抱いていたと考えられる。しかし、そうだとし、ても、文帝に對して、その生前、常々自らの詩文等で忠誠の意を表明していた曹植にとっては、その言葉が全て飾言であったと周囲から非難されなためにも、その死後もなお、一貫して忠誠の意を同じく詩文等で表明しておく必要があったと判断される。つまり、この時期の曹植には、文帝に對する自らの忠義が不滅であることを、周囲に對して表明するためにも、「文帝誄」のような殉死の意を表現した作品の創作は不可欠であった、と判断されるのである。

さらにまた、曹植は、曹叡（後の明帝）に對してもまた、文帝に對する不滅の忠義を表明しておく必要があった、と考

曹植「三良詩」考（矢田）

えられよう。文帝の死は、即ち、次の皇帝を誰にするか、という帝位繼承の問題と直結していた。そのような微妙な時期にあって、曹植は、その點では、太子の曹叡に次いで最も有力な立場にいた。しかも、曹植は曹叡の叔父ということで、世代的にも上であった。それゆえに、曹叡にとっては、自らの即位がほぼ決定的であるとはいえ、曹植は最も警戒を要すべき存在であったと言ってよい。一方、曹植の方としても、文帝との間で熾烈な相續争いを繰り廣げた経験を持つだけに、自らの危険な立場については、十分に認識できたことであろう。とすれば、この時期の曹植には、曹叡との關係を平穩な状態に保つためにも、あくまでも文帝に忠義を盡くすとの態度を、曹叡に對してはつきりと表明しておく必要があったと判断されよう。したがって、この點においても、曹植には、文帝に對する殉死を表明した詩文の創作が不可欠であった、と考えられよう。

このように、黄初七年、文帝の死に直面した當時の曹植の状況を、さまざまな角度から考えてみれば、そのいずれの場合においても、この時期の曹植には、文帝への殉死を表現した詩文の創作が不可欠であったことが確認されよう。その顯著な例が「文帝誄」であると言ってよい。しかし、「誄」と

いうのは、死者を弔い悼むことを本來的な目的とした、言わば、形式的・常套的なジャンルだけに、文帝に對する哀惜の情を表すにしろ、あるいはまた、文帝に對する不滅の忠義を對外的に示すにしろ、それだけでは、十分に曹植の欲求を満たすことはできなかったと判断される。したがって、そのような欲求を満たすに十分な作品の創作が、曹植にはさらに必要であったと考えるべきであろう。そして、その場合の最も効果的なジャンルこそが、「言志」「縁情」を主目的とする「詩」であった、と考えられるのである。

以上の點を總合的に判断した場合、曹植の「三良詩」は、實は「文帝誄」と同様、黄初七年、文帝の死を契機に作られたものであることが、結論として導きだせるのである。

とすれば、曹植の「三良詩」と阮瑀・王粲の「詠史詩」との内容上の差異についても、曹植の詩が、阮瑀・王粲の詩とは創作時期及び創作意圖を本來的に異にするものであった——という點に、その直接の原因が求められるであらう。

〔注〕

- (1) 楊伯峻『春秋左傳注』（中華書局、一九八三）の「文公六年」における注に、「先秦皆三良被殺、自殺之說、或起于漢

人」との指摘が見られる。

- (2) 道家春秋代前掲論文に見える見解。ただし、道家氏の見解は、余冠英・徐公持の説に全面的に依據してのものである。

- (3) 『魏志』鍾繇傳の裴注所引の『魏略』に、「後太祖征漢中、太子在孟津、聞繇有玉玦、欲得之而難公言、密使臨菑侯轉因人說之。」とあることから、建安二十年の曹操の西征の折りに、臨菑侯曹植は魏都・鄴と孟津との間を往來していたことが確認できる。とすれば、この時の西征には曹植は從軍していなかったと判断される。以上が、(B)建安二十年説に對する徐公持の否定的論據の概要である。

- (4) 伊藤正文「曹植詩補注稿（詩之四）」に、「曹植此篇與王粲・阮瑀之作、互有映發之處、疑其同時作矣。……阮瑀卒於建安十七年、……此篇當爲建安十七年以前之作也。」とある。

- (5) 陳祚明はさらに、曹植の「三良詩」に對して、「文帝之猜嫌、起於武帝之鍾愛。此時相遇、不堪生、不如死。慨然欲相從於地下、而殺身良難、……是以隱忍而偷生也。」といった見解を示しているが、この點は筆者とは見解を異にする。

- (6) 何焯はさらに、曹植の「三良詩」に對して、「魏祚安得長」という寓意性を指摘しているが、この點は筆者とは見解を異にする。

- (7) 詳しくは、拙論「怨歌行」の作者について——曹植における『詠史詩』の手法を手がかりとして——（『中國詩文論叢』第十一集、一九九二年）を参照。

(8) 【①説をとるもの】

○伊藤正文『曹植』(岩波書店・岩波詩人選集3、一九五八)

○内田泉之助・網裕次『文選』(明治書院、新釋漢文大系14、一九六三)

○市川桃子『詠史と詠物』(小學館、中國古典詩聚花3、一九八四)

○趙幼文『曹植集校注』(人民文學出版社、一九八四)

【②説をとるもの】

○余冠英『三曹詩選』(作家出版社、一九五六)

○斯波六郎・花房英樹『文選』(筑摩書房、世界文學大系70、一九六三)

○花房英樹『文選』(集英社、全釋漢文大系28、一九七四)

○趙福壇『曹魏父子詩選』(香港三聯書店、一九八三)

○聶文郁『曹植詩解譯』(青海人民文學出版社、一九八五)

【③説をとるもの】

○岡田正文・佐久節『文選』(國民文庫刊行會、國譯漢文大成、一九二三)

(9) この點に關しては、以前から懸案とされていた。例えば、

道家春代前掲論文に「作品の前半のはやる氣持ちと後半の悲痛な調子との違和感は、典據とした「黃鳥」の詩と彼の志との矛盾が、彼自身のなかでまだ解決されていなかったからだろう。」とあり、聶文郁前掲書に「可是作者這樣寫三良自願

曹植「三良詩」考(矢田)

殉葬的心理、却與下邊「既沒」(攬涕)の誤りであらう)以下六句對三良入墓殉葬的描繪、發生前後不協調的矛盾。……「智者千慮、必有一失」、作者雖是詩歌上的高手妙匠、但本詩却有如此缺妥之處。」とある。

(10) 注(9)を参照。

(11) 因みに「文帝誄」には、「悼晏駕之既往兮、感容車之速征。浮飛魂於輕霄兮、就黃墟以滅形。背三光之昭晰兮、歸玄宅之冥冥。嗟一往之不返兮、痛閼闔之長扃。」と、「三良詩」の後半部分と極めて類似した表現が見られる。死者を弔う際の常套的な表現ではあるが、おおいに注目すべきであらう。